

対談 予測不可能性の世紀の終わりに 外交フォーラム-1991.11.00

「予測不可能性の世紀の終わりに」

永井陽之助・青山学院大学教授

中嶋嶺雄・東京外国語大学教授

八九年以来の東欧のドミノ現象はついにクレムリンに及び、ソ連共産党は来年の革命七五周年を前に、解党の止むなきに至った。数年前までは蓋然性の問題とされていたことが、急速に現実化した理由は何だったのであるうか。前半を「戦争と革命」、後半は冷戦という「長い平和」の時代として語られる二〇世紀とは、いかなる時代であったのか。国際政治を現実主義的視点から観察してこられたお二人に、さまざまな角度から話しあってもらった

予想された三つのシナリオが
二年間に全部起きた

——現在、世界は加速度を増して動いているようです。地球全体がこの速度で変わっていった大丈夫なのだろうかという不安感もわれわれにはあります。まず、冷戦の終結とソ連邦の崩壊に直面して、お二人に現在の感想を語って頂きたいと思います。

永井 来年の一〇月は一九一七年の一〇月

革命の第七五周年になりますが、その前にソ連共産党が解体したということは、誰も予想しなかったことではないでしょうか。

考えてみると五、六年前までは、欧米の

国際政治学者、軍事専門家による核戦争、第三次世界大戦の共通のシナリオの第一は、東ドイツの崩壊でした。学生と労働者が暴動を起こし、東ドイツ軍が戦車部隊を出すしかし、それでは防ぎきれなくて、モスクワから軍が出る。これがエスカレートして

いつて戦争になる。

第二のシナリオは、イラン、イラクなどの中東、湾岸紛争に関してのもです。中東に対するソ連の介入があり、石油という資源を巡って危機が拡大していく。

第三のシナリオは、ありえないということでしたが、クレムリンのクーデタですね。ゴルバチョフのベレストロイカに反対して、軍、KGBなどの反動的なクーデタが起きる。その後、アメリカが介入して戦争になる。



佐藤隆三（さとう りゅうぞう）

1931年生れ。54年一橋大学経済学部卒業。62年ジョンズ・ホプキンス大学大学院にてPh. D. 取得。69年一橋大学経済学博士。現在、ハーバード大学ケネディ行政大学院兼任教授、ニューヨーク大学日本経済研究所長、全米経済研究所（NBER）研究理事を兼務。「経済成長の理論」で日経・経済図書文化賞、「菊と藍」で第1回読売新聞賞受賞。その他日本語、英語の著書論文多数。

ていると同時に軽蔑されている。

日本がアメリカについて語る時、アメリカの悪役はビジネスではなく外交、つまり政治家なのです。アメリカのビジネスマンは必ず政治家を通して要求してきます。我々はカーラ・ヒルズ氏の名は知っていても、その背後にいる米国企業のトップたちのことは何も知らない。そして、このアメリカの日本への政治的な攻撃的態度は、日本のビジネスマンによるアメリカに対する経済攻撃に対する反応なのです。

最近、日本の一部の政治家のスタンスが今までとは違ってきており、ビジネスとは関係のない分野まで攻撃しようという嫌米感情が芽生えつつあります。日本のビジネスが依然としてその攻撃の手を休めようとしないうちに、その上になつた政治家が新たに政治的な攻撃までも始めてしまった。これでは、アメリカとの間の摩擦をレベル・アップしたことにしかありません。アメリカの国民は、喜んでソニーや東芝の製

品を買い使っています。しかし、今、日本は経済より一ラシク高いレベルの政治や外交の分野で、アメリカの一般の人々の気持を逆なでしようとしているのです。

グローバル・ユイイズム・プロジェクト

——日米関係の危機が、一段階高まったということですね。

このような風潮の中で日本の外交が注意すべきことは何でしょうか。

佐藤 国民や企業の個々の問題を積み重ねて形になった問題よりは、むしろ政府が一つのユニットとしてもつと遠大で高邁な国の目的を考え、どのような国際公共財をどのくらい世界に対して提供できるかを探ることが必要です。

では、どのような国際公共財を提供できるのか。私は、日本の進路としてカインド・トゥ・ネーチャーとカインド・トゥ・ピープル、という二つのアプローチが考えられると思います。

自然環境は、人間世界を超えて地球全体の公共財なのです。自然に対してやさしくならうではないか。火山爆発やサイクロンのようにやさしくない自然に対しては、これをなだめるのも国際公共的な仕事です。修復と管理ですね。

軍備コントロールも大切な国際公共サービスです。軍備削減は、人に対して親切になることを前提としています。飢餓や難民に对しやさしく接することも優れて国際公共的な仕事です。

これらのうち、軍事に関しては当分の間、世界の覇権国・アメリカに任せておく。日本は環境問題や世界的な食糧不足問題などに对し、多

国籍企業の根幹だったグローバル・ミイイズム（利己主義）ではなく、グローバル・ユイイズム（利他主義）で取り組んでいかねばならない。

グローバル・ユイイズム・プロジェクトとして、むこう三〇年くらいの長期間にわたり、日本はGNPのパーセント位を環境保護や世界の食糧保全に使うべきだと思います。

日本は軍事にパーセント使っていますから合わせて二パーセントですが、アメリカがGNPの四・五パーセント、一時は六パーセントを軍事に費やしていたことを考えれば、決して無理な額ではないはずです。

具体的には、例えば食糧保全プロジェクトとして「コメの問題」を考えてみましょう。

世界は今、深刻な食糧不足問題に直面しています。ですから、日本はコメを自由競争でどんな作るべきなのです。国内ではコメを増産し、場合によってはそれをただで世界の飢餓に苦しんでいる人々に分け与える。同時にグローバル・プロジェクトの一環としてアメリカのコメを買い、これをそっくりそのまま援助にまわす。アメリカにとつて私的財であるアメリカのコメを日本が買い、日本国内に入れることなく海外援助に用いる。こうすれば日本の今の食糧法を変更する必要も生じない訳です。つまり、国内的にはコメを私的財として、また国際的には国際公共財として扱うべきなのです。

安全保障以外の分野で国際公共財を提供するアイデアを開拓し、これを実現してゆく担い手としての役割こそ、日本が目指すべき外交なのだと思います。



この三つが二年間に全部起きたわけですが、しかし、核戦争は起きなかった。確かに湾岸戦争は、イラク軍一二万の犠牲を出す、きびしい戦いでしたが、地上戦はわずか一〇〇時間で終わってしまった。何故か。ここに、私の最大の関心がある。二〇世紀前半は、戦争と革命、イデオロギーと暴力に明け暮れた激しい時代だった。しかし、第二次世界大戦後は、ヨーロッパに関する限り、少なくとも戦争らしい戦争はなかった。冷戦とは「長い平和」であつたわけですが、しかし、中東、アジア・太平洋については、まったく違つたのであつて、朝鮮戦争、ベトナム戦争と、熱戦が連続して続いている、未だにもややもやしていますね。

なぜ二〇世紀前半は戦争と革命の時代で、第二次世界大戦後は「長い平和」の時代だったのだろうか。なぜだんだん沈静してきて、ソ連の共産党の崩壊までいつてしまったのでしょうか。

私が一〇年ほど前、在米中、ハーバード大学国際問題研究センターのサミュエル・ハンティントン教授が、「ローマ帝国以来、いかなる帝国も、平和に崩壊していくことはない。一九八〇年代末までに、特に東ドイツを巡って、第三次世界大戦が起きる可

能性は高い」と断言していました。また、二、三〇年前の話ですが、私の恩師であるデビット・リースマン教授も、「浴室で原爆が作れる時代にならない限り、ソ連のような全体主義国家が内部から崩壊することはありえない」という警句を吐いていたのです。それが、あつという間に内部崩壊した。

社会主義は民族問題を解決できなかった

中嶋 蓋然性として予測されていたことがここにきて急速に現実となったことが、われわれにとっては衝撃なんですね。社会主義がもう駄目になるということは、ベトナム戦争が終わって難民が出たあたりから、私自身もしばしば言ってきたことです。マルクスの思想は一九世紀のグランド・セオリーとして、思想史のテキストには残るだろうが、現実の国民国家レベルでは失敗していくだろうという予想はできたことです。それが、ここにきて急速かつ同時に起こつた。

漠然と予想されていたことが現実に起きた時の態様と帰結は、今、永井さんが言われた三つのシナリオにしても、ずいぶん違いますよね。クレータにしても、結局成功

しなかったわけですね。二〇世紀の前半が、革命と戦争の勃興期であつたにしても、この世紀中葉以降の色々な経験を経て、世紀末には逆の方向に歯車が動き始めた。それがなぜここに至って急速に現実化したのかを説明することが必要でしょう。

ソ連の変動については、共産主義、社会主義の失敗はいまや常識になっています。経済のシステム、たとえば生産の形式、流通機構など、どれを取っても競争原理がなく、うまくいかなかった。だから市場メカニズムを導入しなければならないと言われたのですが、社会主義体制では結局うまくいかない。これが第一点ですが、したがって、第二に今回のソ連激変については、経済面での社会主義の失敗以上に、もう一つの別のアングルから見ることが必要です。つまり、プロレタリア独裁に代表される一党体制、党官僚独裁体制という問題がそれで、組織論の面においてこそ、社会主義ないし共産主義が人間性に著しく反するところがあつたと思うのです。ジョージ・オーウェルの『一九八四年』の世界みたいなものが、社会主義の現実のなかに本当にあつたわけですから。その辺に最大の強調点が置かれてもいいと思うのです。



ソ連の民族問題は、レーニンの理論を吹き飛ばすような形で噴出している

アジア・アフリカを含む非西欧的な第三世界の地域でも、社会主義になれば救済される、ということではなく、社会主義はもつと悲惨な状況を作り出してしまふことがはつきりした。ラテンアメリカでの試みもそうだし、アジアにはカンボジアの悲劇もあった。中国みたいにもっとも強く国家権力を押し出してくる国もある。

第三に、社会主義は民族の問題で失敗した。社会主義になれば民族問題は解決できると言われていたわけです。「万国の労働者は団結せよ」、「勝利したプロレタリアは国境にこだわらない」、やがて「国家は死滅する」といった原理があった。レーニンの膨大な著作の大部分は民族問題に費やされていますね。今ソ連で問題になっている民族の分離独立とか、民族自治、民族自決などという言葉は、何も新しい言葉ではなくて、レーニンの著作を読めば、さんざん出てきます。にもかかわらず、ソ連の民族問題は、そうしたレーニンの民族理論を一気に吹き飛ばすような形で今日噴出している。

こうして社会主義は民族の問題を解決できなかったわけですが、古典的な民族の問題というよりは、今日ではエスニシティの問題として出てきています。これは大変厄

介な問題で、現在の事態を見ていてもわかる通り、ロシア共和国は多民族とはいえロシア人中心にはば一元的に治まっているから、エリツィンも鼻が高いけれども、ゴルバチョフは多様な民族国家であるソ連を代表しなければならぬから、人気が落ちるのは当然です。経済の失敗でペレストロイカが行きづまったから人気が落ちたということだけではない。ソ連全体の指導者が、エリツィンのような人気が得るわけにはいかないのです。

グルジアなどには、ロシアとはまったく違った世界があつて、今はもつとも個人的に反ロシアを主張している。バステルナークの詩にも出てくるように、グルジアの人たちは非常にロマンチックで、詩情豊かな国民です。昔から多くのロシアの作家を魅惑した異文化の地でもあるけれど、そのグルジアからスターリンも、その片腕だった秘密警察のベリアも出ているし、今またグルジア共和国内部のオセチアという少数民族に対しては、爪を剥ぐような抑圧を加えているという歴史的構造もあるわけです。民族問題は、社会主義ではとうてい救済できない宿痾として登場してきている。この問題は、今、世界的な潮流として出てきてい

るエスニックな意味でのナショナリズムの問題とともに、今後も長期に残されると思っています。

世界のこれからの枠組みをどういうふうにつくっていくかは二〇世紀の清算の問題

永井 よく一八四八年の革命に似ていると言われますね。あの時も、民族自決主義的な動きがありましたが、イタリヤやドイツが統一国家になることに對して、内部から分裂が起きた。第一次世界大戦後のウィルソンの民族自決主義はリベラル・デモクラシーの延長線上で唱えたものでしたが、二〇世紀のデモクラシーの基盤は、一九世紀のような、資産と教養を持った、ミドル・クラスではなく、大衆を基盤とするものとなった。第一次世界大戦後、急速に大衆を基盤にしたマス・デモクラシーになるに従って、リベラル・デモクラシーとナショナリズムの幸福な結婚は分裂してしまつた。このことが二〇世紀後半を理解する上で重要なのではないでしょうか。

エスニシティやナショナリティというのも、定義がはつきりしなくて「民族」と訳していますが、ソ連とユーゴスラビアは典



バルト三国ではソ連による
支配の象徴・レーニン像も
倒された(ラトビアにて)

型的なマルティ・ナショナル・ステイトで、アメリカはマルティ・ナショナル・ステイトではなく、マルティ・エスニック・ステイトであり、マルティ・カルチュラル・ステイトです。宗教で言えばカトリックとプロテスタント、ユダヤ教、人種で言えば白人と黒人とヒスパニックとアジア系、これらが混在している。アメリカはメルティン・グ・ポット（人種の坩堝^{ちゅうぶ}）ではなく、サラグ・ボールだといわれるが、ともかく憲法と歴史と宗教意識をかきたてることによって、理念としては、一つのネイションたろうとしていることは確かです。

中嶋 アメリカの場合は、まだ救いがあつて、インディアンを例にとると、あちこちの州に分散しているわけです。しばしばメルティング・ポットと言われるけれども、アメリカの場合には、「アメリカ人」という新しいアイデンティティを持つことができる。しかし今のソ連で、いくつかの民族は一定の領土を持っているけれども、自分たちは「ソ連人」である、といった意識はほとんどない。ロシア人であり、ウクライナ人であり、グルジア人なんですね。

エスニシティについては、確かにいい訳語がありませんね。ただ簡単に言うと、ア

イデンティティを持っているということが一つの条件であり、もう一つは、領土に立脚しているということです。これが難しいところで、それぞれ少数ながらも自分たちの居住区を持っているから、縄張りをめぐる物凄い紛争になる。

ウエストフアリア条約以来、ヨーロッパにはネイション・ステイト（国民国家）の体系が成立したわけですが、二〇世紀前半には、民族と国家が幸福な結婚をして、協調してやっていけると思つた。特にウイルソンは、民族が自決すれば世界は平和になると言つたのです。ところが、現実にはそんなことはなかった。

民族は約三千数百くらい世界にあるので、それを一七〇ほどの国民国家にはめこんだというのが、今日の国際的な仕切りなのです。それに対して下から反逆して、ネイション・ステイトを相対化しようとするという動きが出てきている。二〇世紀の決算として、革命と戦争が終わつたということではまだ済まない問題が今一斉に噴き出てきていると思うのです。

ソ連の問題で、ゴルバチョフに私が同情するのは、そうした難しい場所に彼が立っているからです。ソ連の経済がうまくいか

ない、ペレストロイカもうまくいかないといったことだけで、ゴルバチョフは矢面に立たされているわけではない。ペレストロイカをやり、西側と交流し、また、世界との経済の交流が高まり、ポーダレスになればなるほど、一党独裁政治のたがは弛んできた。同時に、これまで封じこめられていた根本的な問題が表に出てきている。

次にソ連の崩壊が中国にどう影響するかという問題ですが、中国は軍事力による強権で抑えて、中華思想で雁字搦めにしているからこそ、まだソ連のようになつてはいないけれども、社会主義体制は早晚崩れるでしょうし、これから民族問題も表に出てくると思うのです。チベットなどは、文化も言語も宗教も、あらゆる面を考へても、バルト三国以上に一つの独立国家になる歴史的正当性は高いのです。

バルト三国が独立しかつた時、マルタ会谈直後の、アメリカは冷たかつたですね。しかし、今度のようにソ連がガタガタし出すとすぐ、バルト三国を承認しようという方向にいった。すると中国のチベット問題やモンゴルの方断の問題も、中国がある種のレジテマシーを保っている間は、アメリカも口出しできないけれども、そこが崩れ

永井陽之助（ながい ようのすけ）

1924年生れ。東京大学政治学科学卒業。北海道大学教授、東京工業大学教授を経て85年より現職。62年ハーバード大学客員教授。『日本外交における拘束と選択』で吉野作造賞受賞。主な著書に『平和の代償』『冷戦の起源』『政治意識の研究』『柔構造社会と暴力』『時局の政治学』『現代と戦略』『二十世紀の通達』（編著）などがある。



ていつたら、チベットなどの独立承認を言
い出すかもしれない。この点でブッシュ大
統領が先頃、亡命中のタライ・ラマに会っ
たのは注目すべきニュースでしょう。

これらの問題を含めて、世界のこれから
の枠組みをもう一度どういうふうにつく
っていくかが、二〇世紀の清算の問題としてこ
れから出てくるのではないでしょうか。

情報発信手段の飛躍的な発達で 個人の自立性と市民の連帯感が 飛躍的に高まった

永井 よく民族感情を美しく描く人がいま
すが、憎悪とか嫉妬とか非常にどろどろし
た人間の「業」や「劣情」の面と、崇高な
自己犠牲を伴う愛の形で昇華される面と、
二つの面があるのです。今は「歴史の業」
みたいな劣情の面が出てきている。

ロシアの歴史が、イワン雷帝、ピョートル大帝からスターリンに至るまで専制政治
になったのは、ある程度理解できるのです
ね。絶えずアナーキーになる要素を潜在的
にはらんでいるのですから。「争乱の時代」
といわれる一七世紀の無政府状態に陥らな
いためには、二つの手段に訴えるほかない。

ひとつは「恐怖政治」、次がイデオロギー。
スターリンは、徹底した共産主義イデオロ
ギーを鼓吹して、冷戦の過程で敵対者を作
り、「包囲されているのだから我慢しろ」、
と抑圧することによって統一していた。か
つてのソ連には、恐怖とイデオロギーを浸
透させる共産党のネットワークが市民生活
のすみずみまで貫徹していた。しかし今、
そのシステム自体が崩壊していった。

アメリカは、南北戦争という重大な出来
事を介して、ともかくネイションとしての
同一性を保持した。アメリカは今、マルテ
ィ・エスニック・ステイトであるわけが
が、エスニシティを克服するために、徹底
したイデオロギー国家になったと思うので
す。「理念の共和国」という本間長世さんの
有名な言葉がありますね。単一のイデオロ
ギーを持った国はアメリカだけです。マッ
カーシズムの時代に言われた言葉で、「ア

ン・アメリカン」という言葉があります。
簡単に言うと、「非国民」、ですね。戦時中
の日本と同じです。

アメリカニズムと言うかアメリカン・デ
モクラシーは、他の社会主義とかファシズ
ムとか社会民主主義とか、色々なイデオロ
ギーと区別される体制イデオロギーです。
それによる強烈なコンフォミティが強要さ
れる。これがあって、初めて統一されてい
るのです。歴史教育をやり、憲法を叩き込
み、たえず戦争をやって愛国心をかきたて
ることによって、辛うじてアメリカは統一
してきた。それには同化できない唯一のネ
イションはインディアンだけなのです。

一つのネイションたろうと、民族自決主義
を唱えてやっている彼らだけです。しかし
いま米国の大学キャンパスを揺がさせてい
るP・C (politically correct) 運動のよう
な、過激な多文化主義の自己隔離化が進ん
でいる。

スターリンがいなかったらいい国になっ
たという説もありますし、スターリニズム
による巨大な犠牲を払わなくてもよかった
のではという説もあります。私は、スター
リニズムがなければ、ナチズムもなかった
と思います。こうした二〇世紀前半にでき



中嶋 嶺雄（なかじま みほお）

1936年生れ。東京外国語大学中国科卒業、東京大学大学院（国際関係論）修了。社会学博士（東京大学）。66年より東京外国語大学に専攻し、77年より現職。同大学大学院地域研究研究科長、海外事情研究所長を兼任。外務省特別研究員（在香港）、オーストラリア国立大学、パリ政治学院客員教授を歴任。主な著書に『現代中国論』『中ソ対立と現代』『北京問題』（サントリー学賞受賞）『香港 移りゆく都市国家』などがある。

あがっていったものが、なぜ崩壊していったかという理由が、二〇世紀の前半と後半を区別するものだと思います。これは先ほどのサミュエル・ハンティントンなど、優れた政治学者や軍事専門家がなぜ今日の事態を予測することができなかったのかという問題に、関連があります。

二〇世紀のはじめに、ポール・ヴァレリイは、「現代という時代は、本質的に予測不可能性を付与された世紀である。これこそがわれわれがないうる唯一の予測である」と言っています。その理由は、たえざる「科学的事実の世界の出現」という一七、八世紀にはなかった新しい事態です。例えば、エレクトロンというものが出てくる、それによって量子力学が出てきて、電子工学が発達し、今日の情報革命の時代が訪れるということは、ほとんど予測不可能な事態なのです。

ニュールンベルク裁判の最終弁論で、戦犯のアルバート・シュペーアが次のような悲痛な告白を行なっています。「ヒットラーの独裁政治は、史上の先例と次の点で非常に異なっている。それは近代技術が発達した現代における最初の独裁であり、自国の支配のためにあらゆる技術的手段を駆使した独裁であった。ラジオや拡声器を通して、八〇〇〇万の国民は、自主独立の思考を奪われたのである。昔の独裁者は、最低のレベルでもともと自主的に考え行動しよう人間で、高度の資格を持つ助言者を必要としたが、近代技術の発達した現代における全体主義体制は、彼らなしでもまじうるのである。コミュニケーションの手段のみが、昔よりも低いリーダーシップを機械化することができ、この一つの結果は、国家の市民に対する広範な監視であり、国家の犯罪行為に対する高度の秘密性の保持であった」この極限状態がジョージ・オーウェルが描いた『一九八四年』の世界だと思われるのです。

ヒットラーやスターリンに代表される全体主義体制は、ラジオに象徴されますが、現在はテレビとかパソコン、ファックスとかでしょう。七〇年代になって、個人一人

当たりの情報伝達手段の自己装備率が急速に高まっている。これが、前の時代と違うところです。今度のクーデタを見ても、八人組は非常に頭が古い連中で、放送局と新聞社を抑えることしか考えていなかった。

ファックスも電子メールも抑えなければ、外国からのボイス・オブ・アメリカとかBBC放送などを電波妨害することもしなかった。そのために、完全に情報が流れてしまったわけです。ゴルバチョフが軟禁されながらも頑張ったのは、海外の放送を聞くことにより、世界全体が自分の味方なのだ、自分は孤立していない、ということを感じたからだと思うのです。イランのホメイニ革命でも、パリから演説を収録したソニーのカセットを送り込んだから成功した。つまり、市民一人ひとりの情報発信手段が飛躍的に発達したわけです。それによって、個人の自立性と、グローバルなレベルでの市民の連帯感が飛躍的に高まった。これが、七〇年代後半以降、世界市場の拡大と同時に、プライバシーセッションが進行した理由です。

プライバシーセッションには二つの意味があります。経済的な意味では、政府の規制を排除して、市場経済を拡大していくと

いうこと。もう一つは社会心理学的な意味で、公の国家とか民族とか共産主義とかに関心が行かないで、友情とか恋愛とか結婚とかの個人的な生活に関心が集中するということですね。

専門家が予測できなかった、一九八九年の東欧のドミノ現象は、最後にはクレムリンに及んでいった。電波は、ベルリンの壁でも防ぎきれないのです。その根源にあるのは、私は、経済的、心理的プライバイセイションの貫徹だと思っております。

歴史的パースペクティブにおいて ゴルバチョフの革命は成功している

中嶋 私も、永井さんがおっしゃったことに、全体としては賛成なのです。それを裏づける意味できめ細かく見ていくと、今度のソ連のクーデタの失敗について、八人組が、確かにへまをやったことは事実です。

しかも、ヤナーエフという人物は、とてもクーデタを成功させるだけの能力がなかった。彼らが電波やラジオを抑えられなかったのは、ゴルバチョフ改革で急速に市民社会的情况が出現しはじめた今のソ連では、もはや抑えられる状態にないということです。

ついでこの間までソ連脅威論がわが国に横



第20回党大会でスターリン批判演説をするフルシチョフ。この演説は世界中に衝撃を与えた

行していましたが、対ソ強硬論者は、ソ連は日本に比べると何でも劣っていて、情報化は二〇年遅れていると言っていました。

しかし、そのソ連においてさえも、今回、情報とか新しい市民生活が持ちはじめた意味が物凄く大きかったと思うのです。

二〇世紀の前半は、スターリン主義が支配し、農業の集団化があり、計画経済をやっていた。すると、農村から収奪したファンドを重工業に投資していく中で、だんだん工業社会がソ連内部に生まれてくるわけですね。工業社会が生まれてくると、新しい受益者層が出てくる。それが一九五六年のスターリン批判を支えていたわけですね。当時私は学生でしたが、スターリン批判の衝撃は物凄く大きかった。

その非スターリン化にもかかわらず再びソ連は、クレムリン官僚が支配する時代に入っていく。そこにフルシチョフ流のスターリン批判の限界があったのですが、それをもう一度変えようとしたのが、ゴルバチョフだったと思うのです。ゴルバチョフが一九八五年に登場してから、グラスノスチとペレストロイカはうまくいかなかったと言われながらも、それが踏けば踏くほど、ソ連の国民の意識、特に知識人の意識は、物凄く変わっていったと思うのです。社会生活はよくならないし、行列は相変わらず続く、と言いつつも、ゴルバチョフの政策が行き詰まれば行き詰まるほど、それらへの不満を通じて逆に市民社会的な成熟がソ連内部に出てきていた。

永井 一部の論者は、フルシチョフが失脚した宮廷革命にそっくりだと言っています。が、まったく違いますね。フルシチョフ時代の高校卒業者は二五〇〇万人だったのですが、今は一億二五〇〇万人なのです。それだけ知識の水準が高まっている。これがゴルバチョフの新しい革命の担い手です。

中嶋 特にここ一、二年、ソ連に行っているいろいろな人と会ったり、向こうからきた知識人に会ったりすると、彼らが革命的に



多くの犠牲者を出した天安門事件。
しかし中国もじわじわと変わりつつある

変わってきていることがわかります。とても柔軟になって、むしろ日本のインテリ、特に大学でマルクス主義を護持している人たちの方が、はるかに遅れていると思うくらい、革新的になってきていた。この間まではあれほど教条的だったのにと、顔をまじまじと見ざるを得ないくらい、同じ人間でも変わってきた。こうしたことを考えると、ゴルバチョフの革命は歴史的パースペクティブにおいて成功しているのだと思う。そのことによって生まれた市民社会が、エリツィンを生み出したわけです。こうした状況の中では、八人組が成功するはずはなかったのです。

あたまをもたげ出した 東洋対西洋という古い座標軸

永井 一九八九年の六月四日の天安門事件が、なぜ世界にショックを与えたのかというと、ゴルバチョフが中国を訪れて、世界中のジャーナリストが集まっていた中で行なわれた蛮行だということが決定的だったのです。ソ連は、世界が見ているとわかっているから、そんな馬鹿なことができないのです。それだけ進歩している。

さらに悪いことにあの年の六月四日は、

ポーランドの自由選挙でワレサが勝利を収めた日だった。西においてワレサ、東において天安門。あまりにあざやかなコントラストです。

この事件の一週間ほど前に、フランシス・フクヤマが「歴史の終焉」という例の論文を書きました。彼はそこで、自由主義が絶対王政を倒し、やがてファシズムを倒し、冷戦を勝ち抜いて、東ヨーロッパも解放されつつある。その後われわれ西側が耐えなければならぬのは、倦怠と退屈の時代だと言ったわけです。その主張は、天安門事件とワレサの勝利によって、当たったということになった。しかしその後、「ニューヨーク・タイムス」が社説で、「フランシス・フクヤマは退屈の時代がくるなどと書いていたが、とんでもない話である。きたるべき時代は退屈の時代ではない。現在、日本とNIESなど、経済力を持った恐るべき敵が台頭してきている。それは脅威である。われわれは退屈している暇はない」とはっきり書いていました。この社説以後、イデオロギーの対立による東西関係ではなく、古典的な意味での、東洋対西洋の関係、悪く言えば野蛮対文明という古い座標軸が

中嶋 今回のソ連の出来事によって、二年半前の天安門事件の意味が改めて問われていると思うのです。モスクワの場合には、三名の犠牲者しか出なかった。あれほど軍やKGBが強いと言われたところでも、民主化された市民の力が勝ったのです。それに比べると、中国の場合は、六月四日まで残っていた三〇〇〇名ほどの学生を排除するために、一〇万の武装兵力が、戦車や装甲車をバックに突っ込んでいった。数については色々説はありますが、何百人、何千人という規模の人たちが死傷したことは間違いない。桁が違っただけです。しかも、中国の指導者はあれだけの蛮行をやっておいて逆に居直ってしまった。

ソ連のクーデタが、市民社会的にある程度成熟した国では大衆からの民主的な要求を軍勢力によって抑えることはもはやできない、ということを知らしめたことは、われわれにとっては救いでしょう。

今回モスクワでは、インターファックスなどの独立系の情報機関や自立的な通信社が大きな意味を持ったのです。中国にも実は、民主化運動の時にそれは出てきたのです。そういう意味では中国も捨てたものではない(笑)。押し潰されてしまった

けれども、当時の「光明日報」や「上海経済導報」などの新聞でも、また、民主化要求の知識人の間にも、「自分たちだけの民主化要求では駄目なのだ。チベットの人たちの痛みも知らなければならぬ」というような、従来の中華思想を打ち破るような物

凄いな革新的な意識が出てきていた。日本の多くの中国専門家の意見では、結局最後は「銃口が政権を決定する」という毛沢東の言葉のように、中国の人口の八割は農民で、まだ市民社会的な成熟はないというのですが、私はそうは見えない。中国も強権体制下であつて、じわじわと変わりつつある。改革、開放ということをやればやるほど、スターリン時代のソ連と同じように、農業社会において工業化を進めれば進めるほど、その中に新しいテクノクラートや産業知識人が育ってくるわけです。こうした人たちが再び立ち上った時に軍が果たしてこの間のように動けるかというと、モスクワのクーデタ失敗を前例としているだけに、そう簡単にはいかないという気がします。天安門事件当時でも北京の軍区は動かなかった。だから地方から軍隊を持ってきたわけですね。また今日では改革、開放という方向のなかで人民解放軍も利益集団化して土着化しつ

つあるので、中央の司令だけで動くとは限らなくなってきた。

ソ連に自由主義経済と民主主義を導入するのは脳器移植と似ている

永井 グラスノスチのフランス語訳は、「透明性の確保」です。これは、湾岸戦争を理解する上でも重要な意味を持っている。湾岸戦争の特徴は、徹底した情報管理にあります。これは軍が行なったという面もありますが、圧倒的にマスコミの自主規制があった。その本当の理由は、ベトナム戦争にあります。あの時は完全に野放しだった。北ベトナムとベトナムは完全に統制されていて残虐行為をやっているにもかかわらず、こちらは映すことはできない。アメリカだけ一方的に映しだされた。そのため反戦運動が起きて、どうしようもなくなっていました。その深い反省から行なわれたのです。今までだったら、軍が情報を管理するなど、大変なことでした。

中嶋 今度のソ連のクーデタ騒ぎへのアメリカの対応は見事でした。内政干渉ぎりの要求を衝きつけて、ゴルバチョフを救い、その揚句にソ連共産党解体にまで道を開いた。

永井 しかし、対内的には、アメリカは、非常に問題を持っている。私は、かつてレーガン時代の政策を絶えず批判していたのだけれども、今はレーガノミックスのつけが回ってきているわけです。社会主義諸国からラテン・アメリカまで、全部に言えることですが、プライバティゼーションが進行すると、パブリック・セクターからブライベイト・セクターに、徐々に富と権力が移動するわけですね。その過程において物凄い汚職が発覚することになる。

数字を見ても、経済がどんどん悪くなつていったのがわかります。とうとう債務国になってしまった。これだけ麻薬が蔓延した理由は色々あるけれども、政府規制の緩和で関税が厳しくなくなったということがある。また、スペースシャトル「チャレンジャー」の重大事故は、NASAの人員と資金を減らしたため、大変なきつい労働をスタッフに強いたために起こったと言われています。ソ連におけるシステムの腐食が起きました。チェルノブイリの事故と双璧をなしている。

ある経済学者は、一九五二年までのGNP対比のソフト、ハード双方のインフラストラクチャーに対する投資は、六・九パーセントもあつたのに、七〇年代になると

「お二人の美しいハーモニー。」

おまかせください。



お二人の新しい門出を祝う披露宴をお手伝いさせていただきます。40名様より120名様までのご婚礼のご予約を承っております。



ホテルオークラ 運営

ホテル霞友会館

〒102 東京都千代田区三番町8-1

お問合せは(03) 3234-2138(直通) へどうぞ。

一・五パーセントになり、八〇年代のレーガンになると一・二パーセントになってしまったことを指摘している。インフラストラクターに対する投資が低くなると、将来はどうしようもなくなる。

もう一つ強調したいのは、冷戦時代はソ連という敵がいたため、共産主義に対抗していくという張りがあつただけけれども、今はこの「張り」のようなものがなくなつてしまった。このことは大きい影響を及ぼすでしょう。

今のアメリカに、内政第一主義になれという声は非常に強くなつてきている。どちらかというと、アメリカはそういう方向に行くのではないでしようか。ソ連に対して、「ゴルバチョフを救え」ということで、新しいマーシャル・プランということを言つて

いるわけですが、どうでしょう。

今度のクーデタの理由には、新連邦条約の危機感その他、沢山あるが、ゴルバチョフは西側で人気があるので、彼だったらお金をもらつてくるだろうと思つていたら、ロンドン・サミットで米日の反対で失敗した、それでは取り柄はないではないか、ということでしょう。だからこんどこそ新しいマーシャル・プランが言われる。

ソ連に自由市場経済と民主主義を導入するというのは、臓器移植と似ているのですね(笑)。つまり、拒絶反応が起きてしまう。何百年というロシアの体質があるわけでしょう。隣人が少しいことをやると引きずりおろそうとする、悪平等が好きだという体質。たんに七四年間の指令経済体質だけではなく、以前のロシア人の伝統や行動様

式がある。ゴルバチョフはそれをよく知つているから、無理しないようにしている。無理したら拒絶反応が出てきて、しょうがないわけです。マーシャル・プランは、アメリカと西ヨーロッパという同じ体質同士で行なわれたわけで、カンフル注射と輸血だった。今度は臓器移植と拒絶反応ですから(笑)。急進派の言うように急激にやれば、ハイパー・インフレと大量失業、難民、へたをすれば内戦状態になる。

日本は人類共通の原理について哲学とポリシーを持たねばならない

——長期的には地球上にいい話題はないという見方がありますが。

中嶋 そんなにペシミスティックにならないくてもいいと思います。私が永井さんと一

緒にアメリカに初めて行ったのは、一九六七年の四月、第二回日米民間人円卓会議の時です。ちょうど私が中国の文化大革命から帰ってきた時でした。その時の印象というのは、あまりにも鮮烈で、やはりアメリカは凄いなあ、という感じだったのです。それ以来しばしばアメリカに行くようになり、つい先日も行ってきましたが、これらのアメリカがどのようにインテグレートしていくかは、本当に大変だと思いますね。

サンフランシスコのベイ・エリアの住宅地でさえも、もうすでに七〇パーセント近くがノン・ホワイトです。ヒスパニックもいるけれども、アジア系が増えている。だからアメリカには、ソ連とは違った形で、エスニシティの問題がある。

最近、日本の大学入試共通テストに相当するSATのスコアが非常に低くなって、アメリカの児童の学力が深刻な問題になってきているわけですね。まさに教育の解体なのです。こうしたことを考えると、永井さんの言われるように、これからのアメリカは国内的に大変だと思っています。

先ほどのマーシャル・プランの話ですが、マーシャル・プランは非常に有効性を発揮したわけですが、われわれが行って凄いと

感じたほどの超経済大国アメリカだからこそのできたわけですね。今のアメリカでは、ソ連を救済するだけの余力もないし資格もない。

今のアメリカとソ連は、違うといいながらも似ているところがありますよね。共に超大国で、人口のサイズも、多元的な世界であるという点も似ていて、国内の経営が大変だ。こうした状況では、日本に代表される東アジアが大きな役割を担わざるを得ないと思うのです。例えば学力ということにおいては、儒教文化圏というか漢字文化圏の水

準はきわめて高いわけです。臓器を移植するとすれば、アジアの臓器を移植した方がいいのではないのでしょうか(笑)。

永井 国際関係において、大国間の軍事力を基礎にした対立はなくなりましたね。テクノロジーと経済力がナショナル・プライドの源泉になったわけです。つまり私は、日本やNIEなどが教育水準の高い文化を背景に文句なく二一世紀にかけて発展していくと思うのです。コミュニズム、ソ連という共同の敵がなくなった時代に、日本がいかにして西側の一員として認めてもらうか。アイデンティティの問題が出てこざるを得ない。

中嶋 そこで問題なのは、これからの日本

外交のあり方です。何も言わないで援助だけをするというのではなく、人権問題なり核拡散や武器輸出の問題なり、あるいは地球環境の問題など、人間の生存にとって基本的な、人類共通の原理については、きちんと言うべき哲学とポリシーをもっと明確に持つてほしいと思うのです。そうしないと、日本は中国や北朝鮮と一緒にあって東洋的世界のリーダーになるのではないかといった疑念が出てくる。

私は、『二一世紀は日本、台湾、韓国だ』という本を書いたことがあるのですが、現実にはやはりそうならざるを得ないでしょう。ここ数年を取ってみても、たとえば台湾の成長率は七パーセント前後が依然として続くと思います。それに対して、ソ連はマイナス一〇パーセントで、アメリカはプラスマイナス・ゼロのところでしょう。

そうすると、好むと好まざるとにかかわらず、あと何年か経つと、世界のGNPの四分の一以上は、日本、台湾、韓国だけで占めるようになってくる。そのインパクトは物凄く大きいし、そうであるだけに、もつと日本は、西側的な原理に対して、きちんとけじめをつけて、その一員であることをはっきりさせないと、ますます世界の誤解を招



優柔不断で節操がないと言われる
ゴルバチョフだが
(90年2月の最高会議で)

くことになるのではないか。それをやらな
いで、アジア主義とか儒教文化圏だけに依
拠するのは、私は危険だと思います。

ゴルバチョフが出てこなかったら 今日の世界の変動はなかった

永井 今度の湾岸戦争で問われたのは、文
化的相対主義に立って、イラクも悪いけど
アメリカも悪いというような議論です。戦争
一般が悪いという態度を取っていると、人権
というものに徹底した考えを持っている西
欧やアメリカに、よく思われるはずがない。
中嶋 二〇世紀は色々あったけれども、結
局、人権とかデモクラシーとか、われわれ
が正しいと見つけた普遍的な価値があ
るのです。従来は、それらがアメリカの
コア・バリュー（中核価値）であり、フラ
ンス革命の思想でもあったし、孫文の三民
主義とも共通するわけですね。革命のコス
トがいかに大きいかという点ではフランス
革命にまで遡って再検討すべきでしょうが、
その結果産み出された普遍的価値について
日本外交が強調することは、決して内政干
渉ではない。ソ連の政変は、この点で様々
な教訓を残しました。

永井 ゴルバチョフは一九九〇年の二月、

党大会において、「われわれ社会主義者は、
世界文明の主流から外れた。主流に戻らな
ければならない。われわれ社会主義国を世
界文明から孤立せしめた一切のものを捨て
なければならぬ」と発言しました。これ
は、恐るべきことを言ったものですね。

中嶋 私のゴルバチョフに対しての評価が、
一般のものと違ふとすれば、私は彼を確信
犯だと見ているのです。ゴルバチョフは優
柔不断で節操がなく、彼の役割は終わった
と言う見方がありますが、私は、彼の「ベ
レストロイカ」を読んだり来日した時の演
説を聞いたりした感想では、彼は共産党の
最高指導者であつたし、ソ連の代表者でも
あつたから、自らソ連邦の解体は言い出せ
なかつたけれども、市場原理がいかに重要
かを、はつきり知っているとします。社
会主義ではもう駄目だと本音では言ってい
るのです。だから、東欧が解体しベルリン
の壁が崩れた時に、彼は座視していたわけ
です。心の中で、これでいいのだ、と思っ
ていたからでしょう。

今回も、クーデタに巻き込まれて、党の
書記長でありながら、共産党そのものに痛
めつけられたため、思い切つて党の解散を
断行したわけでしょう。そうした意味では、

ゴルバチョフは大変な人物であるし、彼が出
てこなかったら、今日の世界の変動はなかった。

今後、本当に各共和国が独立して、ソ連
が英連邦みたいになるには、まだまだ時間
がかかります。バルト三国は、歴史的に特
殊なので、切り離せば済んでしまうけれど
も、当面の連邦国家をどうやって処置して
ゆくのかが大変な問題ですね。だから、ま
だ当分ゴルバチョフの役割は必要だと思
います。

日本は急にエリツィン・ブームになった
けれども、ロシア人だけの共同体の中で、
いわば大ロシア主義者である彼が人気を博
すのは当然なのです。しかもエリツィンに
は、腕白少年をそのまま大人にしたような
ところがありますね。そうした人物は激動
期のヒーローになれるのですが、彼はいわ
ばポピュリストですから、それでもって物
事は解決しない。だから、まだまだ、ゴル
バチョフの存在意義はあると、私は見るの
です。北方領土返還交渉は、当面ロシア共
和国が相手だとしても、日本の首相が電話
をかける時は、順番を間違えないで、まず
ゴルバチョフにかけて、次にエリツィンに
かけて欲しいですね（笑）。

（九月一四日収録）